

|         |                         |
|---------|-------------------------|
| 氏 名     | つる 鶴 しん 真 いち 一          |
| 学位の種類   | 博 士 (文 学)               |
| 学位記番号   | 文 博 第 343 号             |
| 学位授与の日付 | 平 成 18 年 1 月 23 日       |
| 学位授与の要件 | 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当 |
| 研究科・専攻  | 文 学 研 究 科 思 想 文 化 学 専 攻 |
| 学位論文題目  | レヴィナスにおける超越の探究          |

論文調査委員 (主 査) 助教授 杉 村 靖 彦 教 授 氣 多 雅 子 助教授 芦 名 定 道

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、フランスのユダヤ人哲学者エマニュエル・レヴィナスの哲学を超越という概念を軸にして整合的に理解し、その哲学的意義を明らかにしようとするものである。すなわち、レヴィナスの哲学の根本動機を、存在の次元に「存在からの脱出」を探る「超越の探究」として性格づけた上で、この意味での超越が、「他者への関わり」としての言語と倫理において生起すると同時に主体の主体性を意義づけるものであり、そこから哲学史に見てもきわめて独自な宗教哲学の図式を描き出すものであることを明らかにしていくのである。このように見ることによって、レヴィナスの哲学を、キェルケゴールに始まる実存哲学の新たな展開として、「実存について語ることはできるか」というジャン・ヴァールの問いへの応答として理解することができる。

第一章では、レヴィナスの哲学全体の基盤となる存在観がどのようなものであるかが検証される。レヴィナスがその独自の思想を開始した論文「逃走について」(1935)では、「存在からの脱出」として「外一越(ex-cendence)」という概念が提示されている。このモチーフは『実存から実存者へ』(1947)でも引き継がれ、存在は「存在の悪」として否定的に語られている。だが、第一の主著『全体性と無限』(1961)では、「存在は外部性である」というテーゼがうち出される。このテーゼの狙いは、存在を「関心(Sorge)」として捉えるハイデガーに対して、他者への関わりにおける「欲望(desir)」として存在を捉えることによって、「存在からの脱出」の契機をあくまで存在の次元に見出すことにある。この立場は、第二の主著『存在するとは別の仕方』(1974)においてさらに明確化される。すなわち、「存在すること(essence)」を「内存在性=利害関心(inter-essement)」、超越を「内存在性からの超脱(dés-inter-essement)」として捉え直すことによって、超越が「倫理的言語」によって語られる必要性が示されるのである。以上のことから、「レヴィナスの哲学は存在論批判である」という通説は、存在論からの決別を意味するのではなく、レヴィナスは一貫して存在の次元において存在からの脱出の道を探り続けてきたのだと言わねばならない。

第二章では、レヴィナス哲学の代名詞とも言うべき他者論の内実が検討される。レヴィナスの言う「他者」とは「他なる人間」のことであるが、そこで問題になるのは、あくまで他者との関わりにおいて際立つ「他性」であって、この関係に先立って「私」と「他者」が別個に存在しているのではない。ある意味では、自我にとってはそれを取り巻く全てが「他なるもの」であって、自我との関係に応じて「他なるもの」の性格も変わってくる。『全体性と無限』では、「他なるもの」への関係として、「観想」、「感受性」、「欲望」という三つのあり方が提示されている。観想や感受性は他なるものの他性を解消することへと帰着するが、欲望においては、他なるものは「無限の観念」を私にもたらし、他者として現れることになる。

他者をそれ以外の「他なるもの」から区別する特異な顕現様態が、レヴィナスが「顔」と呼ぶところのものである。顔とは「汝、殺すなかれ」という訴えかけであり、それによって他者に対する私のあり方そのものを倫理的に疑問に付す。この「対-面」において欲望が言語として具体化するのであり、そこにわれわれの言語活動全てにとっての意味の源泉がある。このようにして、レヴィナスの他者論は哲学知のあり方そのものの転換を促すものとなる。すなわち、「知の筋立て」から

「倫理の筋立て」へという枠組そのものの転換が求められるのである。

第三章では、これまでの議論全体から引き出される「超越」概念がどのようなものになるかが考察される。そこで問題になるのは、そもそも内在化する知の枠内において、内在化されないという意味での純粋な「超越」がどのようにして考えられるのかということである。

従来の哲学と同様、レヴィナスにおいても、超越は、人知を超えたものとしての「他者の超越」と、自らが外へと出て行く「自我の超越」という二重の意味をもっている。だが、レヴィナスの独自性は、私と他者との「二者関係」における超越が、実はレヴィナスが「彼」と呼ぶ契機が加わった「三者関係」として考えられている点にある。そこで重要になるのが時間の問題である。意識が成立する時間は、そこで過去が想起され未来が予期されるとしても、つまるところ「現在」の拡張であり、その意味で「共時性」であることを本質とする。超越がけっして意識の対象となりえないのは、そのようなあり方に取り込まれることを拒む「通時性」という時間様相において生起するからである。超越はいつもすでに過ぎ去っているであり、「痕跡」を通してのみ探られる。その不在性を表現するために、レヴィナスは「彼」という語を持ち出す。なぜなら、これはその場に居合わせない者のことを指す代名詞だからである。私を他者へと関わらせるがそれ自身はいつもすでに不在であるところの動力こそが、レヴィナスの言う「彼」であって、それは実のところ、存在を超える「善」を指しているのである。

第四章では、レヴィナスの哲学における「他者」と「神」の関係を明らかにすることが目指される。この考察は、レヴィナスの言う他者とは結局神のことではないか、という疑惑に答えようとするものである。たしかに、レヴィナス自身、しばしば他者を神との類比によって語っており、その他者論に宗教的な措辞を持ち込んでもいる。だが、レヴィナスにおいて、超越の関係があくまで「三者関係」として考察されていることに注意しなければならない。レヴィナスが目指すのは、神との直接的な交渉ではなく、あくまで「他なる人間」への倫理的な関わりを通して「神」を考える道を切り開くことである。それによって、信仰における神と哲学における神を区別して考えるべきだとするパスカルの図式や、倫理の上位に宗教を置いて考えるキェルケゴールの図式とは違った第三の図式が提示される。レヴィナスが自身の哲学に基づいて提示したこの図式は、彼の哲学に対するユダヤ教の影響という問題から切り離して、宗教哲学における新たな図式として十分に意義を持つものである。

以上四つの章の議論を受けて、論文の最後（「結びに代えて」）では、超越と言語の関わりが「記述言語」と「応答言語」という対概念によって整理され、レヴィナスの立場をキェルケゴールの間接伝達論と突き合わせながら、レヴィナスの宗教哲学が「実存について語ることができるか」というヴァールの問いへの応答となりうるものであることが示される。レヴィナスは、われわれが言葉を発するまさにその瞬間にもうすでに多くのことが生じてしまっているということに注意を喚起し、その「痕跡」を探る道を他者への関わりとしての倫理に見出すことによって、実存について語ることが同時に超越について語ることとなるような思索を可能にしたのである。

## 論文審査の結果の要旨

レヴィナスの哲学が世界的に脚光を浴びるようになってすでに四半世紀になるが、その間夥しい数の研究が積み重ねられてきた。その論じられ方もさまざまであって、他者の顔という新奇な概念に基づく倫理思想という面を軸としつつ、ハイデガー哲学の根源的批判、現象学の新たな可能性の開拓、アウシュヴィッツ以降の現代ユダヤ思想の一典型、現代キリスト教神学を始めとする宗教思想への衝撃等々、多種多様な切り口の研究が存在している。それらのいずれにおいても中心的な役割を果たしているのが、超越という概念である。本論文は、この概念に焦点を当てて、レヴィナスの哲学を統合的に理解しようとするものである。

ただし、論者がこの概念に着目したのは、単に既存のさまざまな研究を総合にもたすためではなく、従来の研究で必ずしも十分に考慮されていなかった二つの切り口から、レヴィナス哲学の意義を照らし出すためである。その二つとは、実存哲学と宗教哲学という切り口である。そのような見地から、本論文は以下のような注目すべき論点を引き出してくる。

まず第一に、他者への関わりにおける主体性の照らし返しというレヴィナス的倫理の核心をなす事態は、実存哲学における主体性の問いの新展開として捉えるべきものだという論点である。レヴィナスがサルトルの同時代人であり、フランス実

存主義の立役者であるヴァールやマルセルと濃密な思想的交流をもっていたことはよく知られているが、レヴィナスを実存主義の系譜上で論じた研究は極めて少ない。しかも論者は、倫理と言語をつねに重ね合わせて考えるレヴィナスの立場を、「実存を変質させることなく実存を語ることはできるか」というヴァールの問いへの応答として読み解くという巧みな問題設定によって、実存哲学という視点からレヴィナス哲学の独自性を鮮やかに照らし出している。

第二には、そのような経路で取り出したレヴィナスの言語論の核心は、「記述言語」との対比で「応答言語」として位置づけられるという論点である。この観点から、レヴィナスが超越を語る際に「倫理的言語」を用いたことの意味と必然性が解明されることになる。記述言語と応答言語という対比は、事実確認的発言と行為遂行的発言というオースティンの言語行為論における二分法を下敷きにしている。このように言語行為論を手がかりにしてレヴィナスの言語論に切り込んでいこうという試み自体は、レヴィナス研究においてそれほど珍しいことではない。だが論者は、キェルケゴールの間接伝達論と突き合わせつつこの論点を掘り下げていくことによって、論述に豊かな奥行きを与えることに成功している。この作業は、レヴィナスとキェルケゴールの比較考察に新たな可能性を付け加えるものとして、それだけでも高く評価すべきものであるが、レヴィナス哲学を実存哲学として理解するという本論考の企図に裏打ちされて、いっそう説得力を増している。

第三には、以上で取り上げた考察を通してレヴィナスが提示しようとしたのは、「超越概念の三者構造」として図式化すべき新たな宗教哲学のあり方だという論点である。すなわち、他なる人間としての「他者」への倫理的関係を通してのみ、「哲学か信仰か」というパスカル的あるいはキェルケゴール的な図式とは違った仕方では神を考える道が開けるのである。この点を明確にすることによって、論者は、レヴィナス哲学とユダヤ思想との関係という問題からいったん切り離して、レヴィナスの「宗教哲学」を問題にすることを可能にした。この考察は、レヴィナス哲学が現代の宗教哲学に対してなしうる貢献を考える上で、大きな意義を持つものである。

以上のように、本論文は、難解なレヴィナス哲学を明確な問題設定の下で考察することによって、その独自性と意義を明らかにしたという点で、博士論文として評価に値する研究である。惜しむべき点は、明快を心掛けるあまり、レヴィナスの屈折を極める論述の解釈としては図式的に過ぎる説明が目についたことである。また、論文の鍵である実存という語の理解について、やや曖昧な点を残していることも問題である。しかし、これらは論者が今後の研究によって克服できる事柄であると思われる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年12月5日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。